
[成果情報名] 飼料イネの移植栽培における最適栽培法

[要約] 飼料イネを食用稲と同程度の施肥量で栽培する場合、ホシアオバを14株/m²またはクサホナミを17株/m²とすると多収が期待できる。また、多施肥栽培では、ニシホマレ、ホシアオバを11株/m²の疎植栽培としても10aあたり1.4t以上の収量が期待できる。

[キーワード] 飼料イネ、移植、施肥量、移植密度

[担当部署] 畜産環境部・飼料チーム

[連絡先] 092-925-5177

[対象作目] 飼料作物 [専門項目] 栽 培 [成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

転換水田における主要作物は、大豆、麦、飼料作物が代表的な作物であるが、水田に適した飼料作物として稲発酵粗飼料用稲（以下飼料イネ）が注目を集めている。しかし、飼料イネでは穀実だけでなく茎葉をも飼料として利用することから、この利用形態に適した品種や、低コスト生産のための省力かつ多収栽培技術が明らかにされていない。

このため、本県に適した飼料イネの品種を選定するとともに多収栽培技術及び利用技術を確立するため、施肥量及び移植密度と乾物収量の関係について検討した。

（要望機関名：畜産課、飯塚農林、筑後農林(H12)）

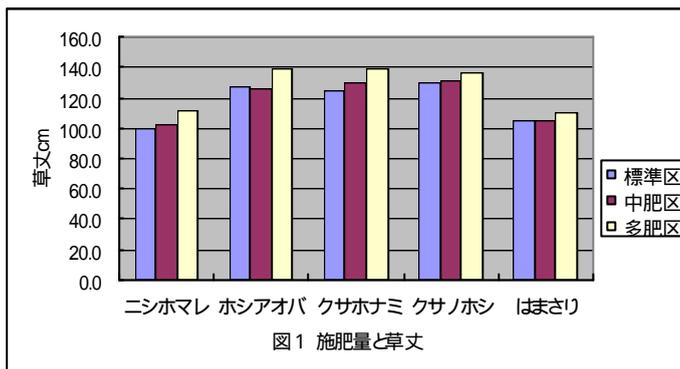
[成果の内容・特徴]

- 1．飼料イネの草丈は、施肥量が増加するに従い高くなる。特に、ホシアオバ、クサホナミは多肥栽培した場合、収穫時草丈は約140cmに達する（図1）。
- 2．一株あたり茎数（分けつ数）は施肥量が多くなるほど、また移植密度が低くなるほど多くなる（図2）。
- 3．乾物収量は、標準施肥ではホシアオバの14株/m²（株間24cm移植）及びクサホナミの17株/m²（株間20cm移植）が多収で、10aあたり1.45t以上の多収が期待できる（表1）。
- 4．多肥栽培では、ホシアオバを利用し27株/m²（株間12cm移植）すると1.5t以上の高収量が期待できるが、倒伏が発生し収穫が困難になる場合がある。また、多肥栽培ではニシホマレ、ホシアオバを利用し、11株/m²（株間30cm移植）の疎植栽培を行っても、収量10aあたり1.4t以上の収量が期待できる（表1）。
- 5．以上のことから、標準施肥では、ホシアオバの14株/m²、クサホナミの17株/m²が適し、多肥栽培ではニシホマレまたはホシアオバの11株/m²が適している。

[成果の活用面・留意点]

- 1．飼料イネを移植栽培する場合の参考とする。
- 2．移植時期が大きく異なる場合及び移植以外の栽培方法の場合は別途検討が必要である。

[具体的データ]



移植：手植え（一株4本植）平成15年6月6日
 27株/m² (条間30cm × 株間12cm)、21株/m² (条間30cm × 株間16cm)、17株/m² (条間30cm × 株間20cm)、14株/m² (条間30cm × 株間24cm)、11株/m² (条間30cm × 株間30cm)

施肥：N:P₂O₅:K₂O (kg/10a)

	標準区	中肥区	多肥区
基肥	7:7:7	10:10:10	13:13:13
穂肥	3:0:3	4:0:4	5:0:5
合計	10:7:10	14:10:14	18:13:18

収穫調査：9月25日～10月8日 黄熟期刈り

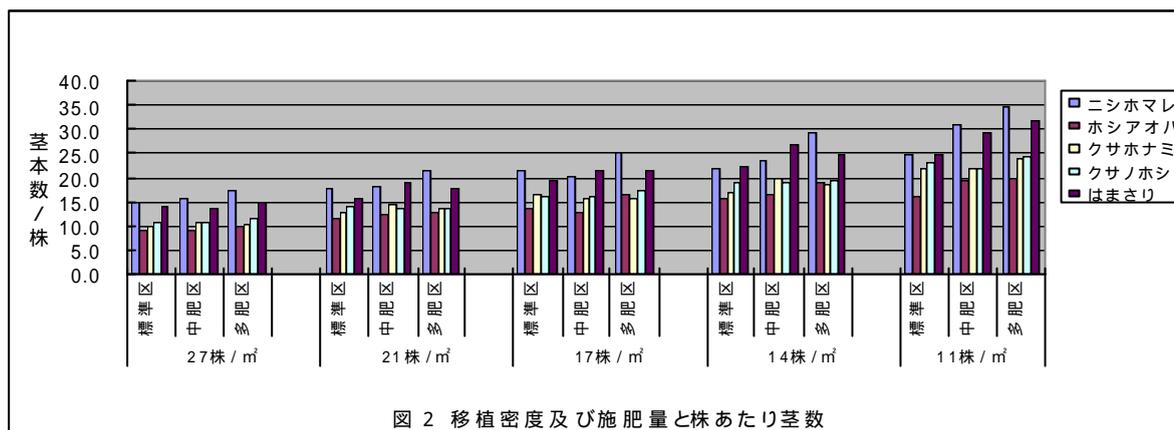


表1 品種及び施肥量、移植密度別の乾物収量 (単位：t/10a)

品 種	標準区 (株/m ²)					多肥区 (株/m ²)				
	27株	21株	17株	14株	11株	27株	21株	17株	14株	11株
ニシホマレ	1.30	1.27	1.31	1.27	1.13	1.47	1.48	1.44	1.47	1.44
ホシアオバ	1.37	1.41	1.43	1.45	1.31	1.54*	1.48	1.39	1.42	1.43
クサホナミ	1.38	1.34	1.49	1.38	1.39	1.31	1.45	1.30	1.37	1.38
クサノホシ	1.41	1.33	1.37	1.34	1.32	1.31	1.27	1.40	1.36	1.39
はまさり	1.19	1.16	1.20	1.18	1.16	1.22	1.34	1.30	1.23	1.23

注) *は全面倒伏、 は一部倒伏

[その他]

研究課題名：飼料イネの品種選定と多収栽培技術

予算区分：経常

研究期間：平成15年度(平成12～15年)

研究担当者：馬場武志、太田 剛、高椋久次郎、棟加登きみ子、平川達也

発表論文等：平成15年度畜産関係試験成績書